http://decfamily.p1.bindsite.jp/2018/

We 35R

No.366　18/04/26

鉄人の愛情と誠実さ

野球部の人以外は、あまり野球と接点がないのだろうか。昔は夜のゴールデンタイムは野球放送が大半を占め、ビールと枝豆で楽しんだものだが、最近は地上波での野球放送もほとんどなくなってしまった。

しかし、「衣笠祥雄」という名前くらいは聞いたことがあるのではなかろうか。

＊

衣笠さんの一言、「江夏豊の21球」生んだ
～鉄人を悼む～

「江夏豊の21球」の時の衣笠祥雄さんの姿が、やはりまぶたから離れない。1979年だった。広島と近鉄の日本シリーズ第７戦。リリーフエースの江夏は、ピンチをむかえていた。１点リードの九回裏一、三塁。広島の古葉竹識（たけし）監督は池谷公二郎と北別府学にブルペンでの投球練習を命じた。延長戦も想定しなければならない。監督としては当然の判断だ。が、江夏の表情が変わった。「何しとるんや。おれに、よう任さんいうのか」。

そんな気持ちを衣笠さんだけが察知したのだ。無死満塁になり、マウンドへ行った。「お前がやめるなら、おれも一緒にやめてやる」。瞬時に言った。これで江夏は落ち着いた。ピンチからの脱出は、この衣笠さんの一言がなければ生まれなかった。デリケートな人だった。極めて繊細で人の心を思いやるアスリートだった。

「鉄人」と呼ばれた。連続試合出場の記録を持っていたからだ。79年８月１日の巨人戦で西本聖から死球を受け、左の肩甲骨を骨折した。しかし、次の試合で代打で登場し、連続試合出場は続いた。この試合の打席は江川卓に対し、フルスイングでの三振だった。「１球目はファンのために、２球目は自分のために、３球目は西本君のためにフルスイングしました。それにしても江川君の球は速かった」。試合後、そう話した。次の試合はフル出場し、ファンを驚かせた。

実は連続出場記録にこだわった人ではない。逆にこの記録にしばられた人だといってもいい。

87年に大リーグのルー・ゲーリッグが持っていた記録を抜いた。が、力が衰えながら記録を更新しなければならないことに、自分自身、納得がいっていなかった。96年だった。カル・リプケンが衣笠さんの記録を抜いた。そのお祝いに渡米する直前、ホテルのバーでご一緒したことがあった。「自分の判断で記録を止めることができなかったんだよ。仕方がなかった。でも、やっとリプケンにバトンを渡せたよ」。なんともいえない笑顔だった。

引退してからは、朝日新聞社嘱託として、評論活動をお願いしていた。普通、野球評論家の原稿は聞き書きするのが当たり前なのだが、衣笠さんは必ずご自分で書いてきた。行数を守っていただけないので、削るのに苦労するのだが、野球に対する愛情と誠実さがひしひしと伝わってきた。

記者の食事会にもつきあってくださり、若い記者の質問にも、気軽に答えてくださった。偉ぶったところの全くない存在だった。

（朝日DIGITAL 20180425）

＊

スゴい人は本当にスゴい。骨折後の「１球目はファンの…」のコメントは、人を思いやる衣笠さんの人柄を示して感動的である。